

「退院後の生活を見据えた認知症ケアチームの活動」

日本医科大学多摩永山病院 老人看護専門看護師 福山雄三

1. はじめに

高齢化が進む一方で、急性期病院における在院日数は短縮化を目指す傾向にある。その中で退院調整が必要となる高齢者は少なくなく、療養環境やソーシャルサポート等の調整のみならず、認知機能の低下に伴う生活の見直しを必要とする患者もいる。例を挙げると、今までもの忘れも目立たなくなったが、入院を契機に目立つようになったケースや、入院前よりも BPSD (Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia : 認知症の行動・心理症状) が目立つようになったケースなどがある。認知機能の低下や BPSD の悪化に対して、治療を通じた身体状況の改善を図ったり環境調整やかかわり方を工夫したりすることである程度改善はするものの、入院前と同程度まで回復させることは難しいことも多いのが現状である。そこで認知症ケアチームの活動の一環として、特に認知機能の評価や院内デイ、また退院調整において取り組んでいることについて紹介する。

2. 取り組み

① 認知機能の評価

当チームで認知機能の評価を行う際、実施可能であれば HDS-R (長谷川式認知症スケール) および MMSE (mini-mental state examination) を用いている。

評価の際、単にそれぞれの合計点数で認知機能低下の度合いを見るだけではなく、各項目の評価対象、また検査時および日常の様子などから総合的に評価することを心掛けている。具体的には、HDS-R で「年齢」「日時の見当識」「場所の見当識」「言葉の記銘」「計算」「逆唱」「言葉の遅延再生」「物品再生」「言語の流暢性」を、MMSE で「記銘」「注意・計算」「再生」「呼称」「復唱」「理解」「読字」「書字」「描画」のそれぞれについて評価する。また正答・誤答だけでなく、回答した内容にも注目しながら評価する。検査時・日常の様子からは、アルツハイマー型認知症に特徴的な「あきらめ」や「取り繕い」、レビー小体型認知症に特徴的な「幻視」などのサインがあるかについても注目し、評価対象としている。

HDS-R や MMSE の結果および検査時・日常の様子や口述の院内デイの様子、またデータがあれば頭部 CT・MRI 等の画像所見や血液データなども含めて総合的に評価し、対象の認知機能の傾向を分析している。

② 院内デイ

患者が入院生活を送るにあたり、認知症により記憶や見当識をはじめとした認知機能の障害、暴言・暴力や幻覚・妄想などの心理行動症状（BPSD）、またせん妄症状により治療が円滑に進められないケースがある。こうした BPSD・せん妄への対応として、症状に至った原因の検索や除去・緩和を図るほか、日中の覚醒を促したり普段の習慣を取り入れたりして生活リズムを整える、回想法や音楽療法のように活力や安心感を引き出す等、様々なアプローチ法がある。当院では日中に約 1 時間、集中治療室を除く全病棟を対象に BPSD・せん妄症状のある患者を 3～4 名程度集めて体操、見当識訓練や回想法・音楽療法、塗り絵・書道などのアクティビティを行い、BPSD・せん妄悪化予防を図っている。

③ 退院調整

退院後の生活において必要とされる情報としては、認知機能の状況だけでなく、生活する上でどのような注意や工夫が必要かということが重要になってくるケースも多い。そこで認知機能の評価結果や院内デイの反応等をもとに、起こりやすい場面を挙げながら、それに対する環境調整の方法やかかわり方の工夫等について助言をしている。

3. 現状と今後の展望

認知機能の評価により、退院後の生活において家族・訪問看護師・ケアマネージャー等から介護上の不安が低減したという声があったり、退院支援部門のスタッフから「退院先を検討するにあたっての判断材料となった」「在宅や施設のスタッフへの連携がしやすくなった」等の声があがっており、今後も継続して取り組んでいきたいところである。一方で認知機能の検査は本人へ「私は認知症なのか」という疑いを持たせたり「私はボケているんだ」という印象を与えてしまうおそれもあるため、実施可能かどうかの判断や、実施する際の説明のしかたは非常に慎重になる必要がある。

院内デイでは、参加した患者が積極的にアクティビティに取り組んだり、なじみのある曲を歌ったりするなど、病棟での様子とは異なった姿を見せることがある。また、院内デイでの様子を写真や動画に収め、病棟スタッフや患者家族に見せることで「こんなにいい顔をするんだ」「(アクティビティを) 何か病棟でもできないか」という反応もある。このように BPSD・せん妄症状のある患者が院内デイに参加することで、単に患者のよりよい状態を引き出すだけでなく、家族の安心につながったり病棟でのケアの改善のヒントにもなっている様子が見受けられているため、今後も継続していくとともに、家族ケアや病棟への還元も視野に取り組んでいきたい。